高校生と留学生の交流会
を開催しました

埼玉の加藤一郎です。今回は地理部会としての活動ではなく、勤務する学校でのイベントを紹介します。

◎ 3年次地理Bの授業

私の勤務する高校は全日制・単位制の高校で、多様な選択科目を開講しています。旧課程・地理Bは3年次の選択科目で、約80名（3年次生の4分の1）が受講しています。そのうち、私が受け持っているのは45名。2クラスに分割して授業をしています。2学期後半から「日本に暮らす外国人ーこれまでとこれからー」というタイトルで、多文化共生について考えてきました。

◎ 交流会開催のきっかけ

授業を始めるにあたり，これまでずっと気になっていた同じ市内にある日本語学校・東亜国際外語学院を訪問しました。「いったいどんな留学生が夢や目標をもって通っているのだろうか？」。疑問を解決するための訪問でした。留学生は，各自の日本語力に応じたクラスで将来の目標に向かって熱心に日本語を学んでいました。このとき案内してくれた同学院教務主任の安達冬子先生の発案で，今回のイベントが実現したんです。

◎ 交流会当日

安達先生の希望でベトナム・タイ・中国出身の留学生12名が本校を訪問する形で開催することになりました。両校の紹介ののち，留学生・高校生がそれぞれの夢や目標，ふだんの生活について発表

し、最後に自由な交流の時間を設けました。地図帳で留学生の故郷を探したり、趣味について語り合ったり、一緒に写真を撮ったり・・・。1コマ50分の交流会はあっという間に終了しました。

◎ 多文化共生に必要なこと

「多文化共生」は昨年4月から始まった新科目「地理総合」でも3本柱の一つに掲げられています。私は互いに知ることが多文化共生の第一歩だと考えています。浅いなあ、世間知らずと言われそうだなあと思いつつ、スタートはここだろうというのが私の実感です。今回のイベントも、日本語学校の実態を知りたいと思い、訪問したところから始まりました。多くの留学生は日本語学校を卒業後、さらに日本の専門学校や大学で学び

を深め、日本企業への就職を希望していました。また、学びの成果をアジアの発展のために尽くしたいと話していた留学生もいました。夢や目標をもって学ぶことに衝撃を受けた高校生が多かったように思います。

一方、留学生にとっても貴重な経験になったようです。たとえば、日本の学校では当たり前前の部活動は、母国の学校にはないそうですね。放課後、弓道部と剣道部の活動を見学したのですが、ベトナム出身の留学生は空手二段の腕前で、日本の子どもたちにも教えているそう。日本の武道を見るだけではなく、ほんのわずかですが体験することができて大喜びでした。また、内モンゴル出身の留学生は、モンゴル弓道の経験者。弓道部の

生徒が矢を射る姿を真剣に見つめていました。

このように，勉強一辺倒だった自身の高校生活を振り返り，日本の高校生の多様な学びや体験活動をうらやましく感じていたようです。安達先生によると，留学生はアルバイト先の年長の日本人との交流はあるものの，若者同士の交流は少ないそう。マスコミ各社にも取材・報道してもらったので，帰宅後，大いに盛り上がったそうです。

いずれにしても，異なる文化を知ることは自分の文化の価値を改めて評価しなおすことにもつながったような気がしています。

◎きれいごとでは済まない

私の所属する埼玉県高等学校社会科教育研究会地理部会では，在

日外国人の問題をテーマにした研修を行ってきました。なかでも、インド出身者が集住する東京都江戸川区では、「におい」もいさかいの原因になることに驚いたことを今でも思い出します。しかし、日本は人口減少社会。ますます外国人とともに生活していくのが当たり前になるに違いありません。文化の違いや壁を感じる場面に遭遇したときに、未来の日本をつくっていく若者たちにとって、今回のイベントがほんの少しでも役に立ってくれたらと思いながら、次のイベントを構想しています。

* 勤務校・地理Bのホームページ

<https://seifu.sakura.ne.jp/324/2022/chiri>

* 埼玉県高社研地理部会のホームページ

<https://seifu.sakura.ne.jp/chiribukai/>

加藤 一郎・かとう いちろう
埼玉県内の公立高校教諭。埼玉県
高社研地理部会長。

kato.ichiro.c5@spec.ed.jp